
妾の前世は女王である。

ROM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妾の前世は女王である。

【Nコード】

N0703Z

【作者名】

ROM

【あらすじ】

今世は貧しい農家の娘であるが。しかし、妾は自分がいかに前世で恵まれておったか、何一つ分かっていなかったようだ。妾の知らなかった民の現実を事実目にし、妾は逃げ出した。一匹の猫と動物たちと暮らしていた妾であるが、突然その時はやってきた。妾は前世で治めていた国の対極にあった国で侍女をすることに…なるやもしれぬ。

妾の今世の始まり（前書き）

このお話はまず完結目指します。

なので、悪い評価は気にしちゃうのでとりあえず評価無しで…

感想は大歓迎です！

最初は暗いですが、基本明るくしたいと思っています。

結末はまだはっきりとは決めていません。

妾の今世の始まり

妾^{わらわ}の前世は女王である。

今は洞窟の中で生きている幼子に過ぎぬが、たしかに妾は今の世に生まれ出でる前、メレイフィア国の8代目女王アーメリア1世であつた。

気づいたのは妾が現で母親と思われる女の腹から出て3ヶ月経つた頃であつた。

それまではぼんやりとした意識の中、なにも考えず人としての欲求に従つて生きていたようであるが、ちょうどその頃妾は自分が見覚えのない古びた木の天井を初めて意識したのである。

そして妾は自分がうまく動けず、齒もなく、言葉もしゃべれない事にやっと気づいた。

当然最初は誘拐されたのだと思つたが、その考えはすぐに打ち消した。

死んだときの記憶は鮮明に残っているし、妾の腕や手がむちむちとした小さな赤子の手であつたからな。

ああ、生まれ変わりという考えがすぐ浮かんしたのは妾の最初の息子、ヘンリーのおかげである。

あれは妾が第2夫であるティルとの息子を腹に宿していた頃であつたか、妾がヘンリーの父が死んだときの話をしていると、ヘンリーはじつと妾の目を見つめながら言つたのだ。

「母上は、生まれ変わったら何になりたいの？」と。

あのととき真剣に考えていなかったら、生まれ変わったなどという考えは簡単には浮かばなかっただろうし、今よりもっと焦っていたことだろうな。

まあとにかく、妾はすぐに理解し、今世の状況を把握し始めた。

妾は貧しい農家の6番目の子供であるようだった。

上に息子3人、娘が2人。

皆黒髪で痩せておった。

母親とおぼしき女が妾に「お前なんて産むつもりは無かったのに。

」と言ったときは驚いたな。

妾が子供を産んだときは国を挙げて喜んだものだが。

自分が腹を痛めて産んだ女にそう言わねばならぬとは、なんて悲しいことだろうと思った。

貧しさのせいか皆心が荒んでおるようで、言葉のわからぬと思われるている赤子の妾に愚痴を言ったり、妾をつねったり、殴ったりして笑っておった。

妾は国民全体のことを見ていると思っておったが、妾の治世の時代にもおそらくこの家のような家庭はあったのであろうな。

妾は自分の自惚れに恥じ入った。

神は妾にこのことを教えたかったのかもしれない。

妾は今できることを精一杯しようと思った。

2歳にもなると、妾は他の子供達に混じって働いた。

相変わらず女達に蹴られたりはしておったが、男達は妾にかまわ

なくなった。

妾はその頃になって初めて家族に「妾の前世は女王である。」と言った。

家族の前世はなんだったのだろうと思ってたことだったが、彼らは妾を虫を見るような目で見て殴った。

おそらく誰も前世の記憶がないのだろう。

妾は混乱させないように、この話をもうするまいと思った。

10歳になった頃、妾は男達の妾を見る目が色欲を含んでいるのに気づいた。

妾の容姿は前世と変わらなかったようで、他の兄弟と異なっているのが不幸であったようだ。

気をつけてはいたが、ある日の夜兄たちが妾の布団をめくりあげ口を塞いできた。

そのとき妾は今世で初めて魔法を使い、兄たちはそれに驚いて逃げていった。

前世で初めて覚えた最下級なものであったが、今世で周りに魔法をつかえる者はいないので驚いたのであろうな。

翌日、昼間は妾も兄たちも普通に過ごしたが、夜妾は水を飲もうと家の外に出たとき、母親と父親の話す声を聞いた。

「ボーイ達から聞いたかい？あの娘、魔法を使えるようだよ。」

「ああ聞いた。あいつら他の娘達には目も向けなくせに手を出そうとしたらしいな。」

「やっぱり、売っちゃまおうよあの娘。あんたの言うとおり成長するまで待つてよかったよ。魔法が使えるとはね。」

「あいつは幼い頃からあの美貌だったからな。人買いが村に来るの来週だろう？驚くぞ、あの男。あの娘は口調は古めかしく変だが魔法まで使える処女となると、まずいだろうからな。」

「あたしにはあの娘は昔からきもち悪かったがね。妙に大人びてるし気取ってる。それに覚えてるか？前世がどうか言ったの。あれで働きが悪かったら狼のえさにしてやるとこだったよ。」

「そんなこともあったな。まあとにかく、あの娘には人買いを親戚の男だと言えば疑うまい。銀貨何枚になるだろうな、来週は酒が飲めそうだ。」

「領主にもそう言おうよ。あの娘あの夫人に可愛がられてるんだ。金目のものを盗みもせず……」

そのまま妾は家を出た。

前世の家族、治世、生活、今世で見聞きしてきたものなどぐるぐる考えていたせいか、森に入り込んでどのくらい歩いたのか妾には分からなくなった。

魔法は位置検知の可能性があるため、使えなかった。

妾はしばらくさまよった後、森の中に小さな洞窟を見つけた。

今ここで暮らして一月になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0703z/>

妾の前世は女王である。

2011年12月2日19時59分発行